

# 幼稚園教育実習における「教育実習指導」と

## 日本語表現科目との教科横断の必要性

—実習日誌の記述指導を中心として—

中野真樹  
塚越亜希子

### 1. はじめに

幼稚園教育実習や保育実習において、実習先の指導担当者から「近年、実習生の日誌記述力が全体的に低下している」と指摘されることは珍しくない。また、実際に学生が実習日誌の記述にさまざまな困難感を抱えていることは、実習指導の場や普段の談話でもしばしば語られる。筆者らは、「教育実習指導（担当：塚越）」「日本語表現（担当：中野）」の科目担当者として、それぞれの立場から実習日誌の書き方について指導を行ってきたものの、状況はなかなか改善されない現状がある。そこで、実習日誌記述能力の向上のために科目を越えた連携指導を試みることにした。そのために、まずはどのような点が不足していると指摘されるのか、実際の実習日誌の日本語表現法について調査をおこなった。またどのような点に記述の困難感を抱えているのかについて自由記述式のアンケートを分析したうえで、「教育実習指導」と「日本語表現」の連携の必要性と今後の課題について検討した。

### 2. 「教育実習指導」と「日本語表現」の連携の必要性

#### 2. 1 実習日誌記述指導に関する先行研究

実習日誌の記述力の低下については、すでに多くの先行研究で指摘されている。たとえば、佐藤(2014)では、「近年、実習を委託した幼稚園保育園から、学生の日誌の書き方に問題があるとの指摘を受けることが多くなった（佐藤 2014：57）」として、科目「日本語の表現法」で課題として出された作文を分析している。その結果、基礎的な日本語表現法の習得が不十分であり、そのため実習日誌にもやや不適切な文章が表出してしまっていることを指摘し、保育科学生への文章表現法指導の重要性を述べている。それをうけて佐藤(2015)では、実際の学生が書いた実習日誌を分析し、問題のある記述を整理している。そしてその改善のために科目「日本語表現

法」で行っている課題文の添削のとりくみを紹介し、一定の成果が上がっていることを報告している。このほかにも、実習日誌記述指導に関する先行研究のなかには実習生が日誌の記述に難しさを感じていることや、実習先で実習生の日誌記述への不十分さを指摘される例を報告しているものは多くみられた。近年のものを例示すると、井口(2012:109)では、「学生の文章表現力の低下が問題視されている」として、「実習園からの評価でも、日誌の記述が不十分であるとの指摘を受けることが少ない。中には、その日の日誌を翌朝の日誌提出時刻までに書き終わらなかった学生さえも存在する」と述べている。猿田(2008:54)では、実習の日誌記述に大変だったことについてアンケートを行っており、「文章のまとめ方」「書く内容が感想になってしまう」などといった学生自身の自覚する課題について報告している。権藤(2007:40)においても、「実習巡回の折に実習施設の指導者から実習日誌に関して不十分であるとの指摘を受けることも少なくないのが現状である」と述べている。ただし、これらの先行研究はいずれも日本語表現技術の熟達のみを焦点をあてているわけではない。ただ単に日本語の文章を上手に書けるようになればよい実習日誌を書けるようになるわけではなく、実習日誌を書くことの意義を学生がよく理解し、実習先の保育や教育の理念や意図をふまえること、観察した結果を適切に分析して日誌に書き出すこと、日誌を書くことによって自身の保育に向かう姿勢や課題をあきらかにして、今後の学びに役立てることといった実習や日誌との向き合い方、保育者としての専門性の獲得や成長も重視されており、そのためのより適切な実習日誌の記述指導のありかたについて検討しているという共通点があった。

## 2. 2 実習日誌記述の問題点

### 2. 2. 1 実習日誌の調査

本学でも同様に、実習先担当指導者から実習生の日誌の記述の問題点について指摘を受けることが多くある。そこで、日本語表現技術の実態を知るために、実際に学生が書いた実習日誌の調査を行うこととした。本学の幼稚園教育実習は1年次の後期に行われる観察実習と、2年次の前期に行われる本実習があり、そのほかに保育実習が2年間を通して3回行われる。今回は、2年次の幼稚園教育実習本実習を終えた学生の実習日誌を対象とした。

調査方法は、手書きの実習日誌から、特別な行事等があった日を除いて学生自身が一番よく書けていると判断した日を1日分、ワードファイルに電子化して提出するように求め、それを担当教員が評価し、記述に問題のある個所を抜き出していくこととした。ワードファイルの提出の際には、学生にこれを実習日誌の記述分析研究に利用することを説明し、承諾を得ている。ここで、手書きの原本ではなく電子

化資料を対象としたのは、この実習日誌をデータとして蓄積し、継続的な計量的研究を行うことを計画しているためである。

日誌の形式と入力例を以下の図 1 で示す。

図 1 実習日誌入力例

平成 28 年 6 月 6 日(月)		天候	曇り	組	4 歳児 [ ] 組	指導教諭検印	省略
本日のねらい		時間について学び、時計の製作を通じて時の記念日を知る					
実習のねらい・内容		絵を描く、作る(製作)などの指導をどのようにするのかを知る					
<保育活動>							
時間	環境構成	幼児の活動			教師の指導・援助 実習生のかかわり		
8:45	・外	○順次登園 ・挨拶をする。 ・身支度をし、帽子をかぶって外に出る。 ・外で自由遊びをする。 (砂場、三輪車、鬼ごっこ、なかあて等) ・片付ける。 (体操)			(教)登園して来た幼児と保護者に明るく挨拶をし、言葉を掛けたり触れ合ったりしながら、健康状態を把握する。 (実)幼児に挨拶をし、身支度を整えてから、帽子を被って外に出て遊ぶよう促す。		

図 1 のとおり、本学の教育実習日誌は、項目別に時間軸に沿って書いていくという時系列型日誌となっており、「日付、天候、組、指導教諭検印、本日のねらい、実習のねらい・内容、保育活動、本日の実習から学んだこと・感想・反省、指導教諭からの助言・指導・その他」の記入欄がある。また、「保育内容」については「時間、環境構成、幼児の活動、教師の指導・援助、実習生のかかわり」にわけて記入することとなっている。実際の日誌は手書きであるが、その構造をできるだけ反映するように指示をして、学生が電子化を行った。このとき、実習先指導者による添削が入っている場合は、その指示の方を反映することとし、完成した形の実習日誌の再現を求めた。また、環境構成は図が示されていることが多いが、これは入力に時間がかかるということで省略した。「指導教諭検印」「指導教諭からの助言・指導・その他」は学生自身ではなく実習先指導担当者が記入するものなので省略した。

電子化された実習日誌は、114 名分が採取できた。このデータを「日本語表現」担当教員が確認したところ、114 名中 45 名の日誌から、公的な記録としては日本語表現にやや不相当と感じられる例が見られた。不相当と考えた理由について「表現上の不備」「話し言葉を使用している」「こどもへの配慮が不足した記述をしている」「誤字がある」の 4 つに分類し、以下に代表的な表現上の不備について実例をあげて紹介する。用例は整理のために通し番号を付けた。不相当な例を下線で示し、記述された箇所について日誌の項目名を用例の後の ( ) 内で示した。プライバシー保

護の観点等から用例は一部改変をしている場合もある。

（１）表現上の不備

一読したときに日本語としてやや不自然と考えられる例、文法的な誤りの例、説明不足の例、文意がやや不明瞭な例を「表現上の不備」とした。①～⑤は文章コントロールができていない例である。⑥～⑦は書かれるべき情報が漏れているため、文意を推測するという読み手の負担が必要となる例である。⑧は文章表現上問題はないが、あまりにも異なった事象を並列しているため、とまどいを感じた例である。

①このように実際に体験することで、日本文化を覚えるために必要なことだと思いました。(感想)

②お眠りをピアノで弾いて促す(実習生のかかわり)

③明日は〇〇先生の保育参観の様子が見れるということなので色々な事を学ばせて頂こうと思います。(感想)

④上着を正しく着れない子、ボタンができない子がほとんどだった。(実習生のかかわり)

⑤幼児と一緒に体を動かしたり、楽しむ。(実習生のかかわり)

⑥(引用注：大縄跳びの時に)横切る幼児を待つようにしたが、優先してしまっただため飛ぶほうの幼児を待たせてしまうことになった。(実習生のかかわり)

⑦ズボンにしっかりインしているのかを確認して一人ひとりさようならをする。(実習生のかかわり)

⑧手紙の出し方、尿の出し方を伝える。(実習生のかかわり)

（２）話し言葉を使用している

日本語として不自然というほどではないが、公的な記録として提出される実習日誌に書かれているとやや違和感を感じる話し言葉をここで紹介する。

⑨変な緊張をしてしまい自分のいつもの感じで出来なかったのが残念に感じました。(感想)

⑩なかなか描こうとしない子には優しく「この色でやってみよっか?」と声掛けを行い(実習生のかかわり)

⑪子ども達が集中して製作してくれるよう、声掛けにはすごく気を付けてどうしたらよいのか考えて声掛けをしたいです。(感想)

⑫外遊びの時にしゃぼん玉をやりました。年中さんはストローを使ってやってい

ました。(感想)

⑬今日は、大根の収穫をして、なかなか獲れなさそうにしている子も「先生見て見て」と、とても大きな大根を収穫していて(感想)

⑭幼児の名前と顔が一致するように、どんどん覚えていこうと思います。(感想)

⑮雨でグラウンドがぬれていたで、中に入らないよう、しっかり話す。(実習生のかかわり)

### (3) こどもへの配慮が不足した記述をしている

こどもに対して配慮が不足していると見られる記述例は2例あった。⑯は実習生が主観的なきめつけを行っており、またそれに対してどう声かけや対処をすればよいのかが記載されておらず、ただ非難めいた文章になってしまっている。⑰は、降園の場面であるが、家に「帰る」主体はこどもであるのにもかかわらず、「帰す」という他動詞を用いているため、文法上は動作主が実習生となっている。そのため、「実習生がこどもを帰らせる」というような文意になりこどもの主体性を欠いた記述となっている。

⑯昨日に比べてボーっとしている子が多い。(実習生のかかわり)

⑰一人一人にタッチして帰す。(実習生とのかかわり)

### (4) 誤字がある

手書き文章を電子化したため、誤字については入力ミスや変換ミスがうたがわれ、あきらかな誤字と判断するのが難しい。また、原本には誤字があったかもしれないが、ワープロソフトの予測変換により誤字が正されてしまっている可能性もあり、誤字について検討するのは限界があるが、あきらかに語の表記をとりちがえていることが分かる例のみ、ここで示した。

⑱完食チャンピオンをめざし完食を目指す(幼児の活動)

⑲コンテナを開け食器・バッドなどを持っていくように促す(実習生のかかわり)

⑳計画を立て、シュミレーションをし、カンペを用意するなどをしても想定の時間に活動が終わらなかつたり(感想)

用例の紹介は以上である。今回の調査対象は、2年生最後の実習となる幼稚園本実習の日誌であるが、その時点でもなお、40%近くの学生の日誌に、日本語表現上のなにかしらの不適當な部分があるという結果が出た。ただし、いずれの例も理解

不可能なほどの表現上の不備ではなく、実習先でともに活動している指導者にとっては、⑥～⑦のような書かれる情報が不足している文章であっても、文意の推測は難しくないことも考えられる。とはいえ、なるべく読み手の負担を減らす必要はあるだろう。また、話し言葉の使用については、実習先の指導担当者が、実習巡回中の養成校教員との会話の中で「話し言葉を日誌で書かれるととまどうこともあるが、近年の学生がその方が書きやすいというのであれば、日本語のバリエーションとして許容し、そのかわりもっと保育の専門性にかかわる日誌指導をした方がよいのかもしれないと考えることもある」と葛藤した様子ながらも語ることもしばしばある。この語りから気づくことは、実習日誌は完璧な日本語や美しい日本語を書くためのものではなく、保育の学びの一環として書かれるものである以上、「よい実習日誌」は日本語表現技術を身に着けるだけでは書けないということだ。

実習先指導者からよく言及される日誌記述の問題点としては「漢字の間違いに気づかない」「日誌を話し言葉で書いてしまっている」「気づきが書けていない」「こどもや施設利用者への配慮に欠けた表現記述をしてしまう」などがある。ここであげられる記述の問題点には、基礎的な日本語表現法に関するものから、保育者・教育者としての心構えに至るまでさまざまな論点が内包されていると言えるだろう。

## 2. 2. 2 学生の抱える実習日誌への困難感

幼稚園実習日誌に日本語表現上の不適当な例が多くみられることを確認したその一方で、学生も自分が実習日誌をよく書けていると感じている者はほとんどなく、何かしらの困難感を抱えている様子がある。詳細を知るために2016年の7月、最初の実習となる幼稚園観察実習終了直後の日本語表現の時間に、1年生全員を対象として、日誌の記述や実習時のコミュニケーションで困難をおぼえた点についての自由回答式のアンケートを行った。その中で「日誌はうまく書けましたか。困ったことや注意された点があれば教えてください」という項目を設け、日誌の記述についての満足度や困難感を尋ねた結果、「日誌をうまく書けた」と回答した学生はいなく、多くの学生が直接記述内容を注意された経験があったり、日誌の書き方に不安をかかえたまま実習を終えていたりした。その内容について検討した結果、先行研究と同様に基礎的な日本語表現法の習得にかかわる問題と、実習態度や観点等にかかわる保育の専門性にかかわる問題が混在していることがわかった。そこで、以下に採取された回答内容を(1)日本語表現法についての問題点、(2)保育の専門性に関する問題点の2点に大別し、整理して示した。(記述内容については読みやすさやプライバシー保護等の観点から、重複した内容のものを整理し、適宜要約や書き換えを行っている)

(1) 日本語表現法についての問題

- ・誤字脱字が多いと指摘された
- ・飛ぶ・跳ぶ、書く・描く、体・身体などの同訓異字の使い分けがわからなかった
- ・「うんてい（雲梯）」の漢字がわからなくてひらがなで書いて注意を受けた
- ・「制作」を「製作」と書くように指導された
- ・「話し言葉で書かないで」と言われたがどれが話し言葉に該当するのかわからなかった
- ・「促す」「伝える」「話す」などの使い分けがあいまいでよくわからなかった
- ・「バッグ」を「かばん」、「上着」を「園服」と書くように言われた
- ・「アナウンス」などのカタカナ語は「放送」のように日本語に直すように言われた。「踊る」より「体操」の方がよいと言われた
- ・会話を「」を使ってそのまま書かないで書き言葉に直すように指導された。
- ・うまくまとめられずに長文になった
- ・詳しく書けなかった
- ・何を書いたらよいのかわからなかった
- ・感想がうまく書けなかった
- ・細かいところを書いていないと言われた
- ・もう少しメモを詳しく書いておけば日誌が早く書けたと感じた

(2) 保育の専門性にかかわる問題

- ・「子ども」ではなく「幼児」と書くように指導された
- ・日誌では「教師」ではなく「保育者」と書くように言われた
- ・日を重ねるごとに日誌に書く内容が重複しまった。とくに気づきが毎回同じになってしまった
- ・過去形を使わないようにと言われた
- ・環境構成を図でなく文字で書くようにと言われた
- ・幼児に否定的な言葉は日誌に書かないように指導された（例：できない→むずかしい、ふざけている→座っているのが難しい、服の乱れ→身だしなみ）
- ・「ふざけている子」と書いたら「話を聞いていなかった子」と書くように指示された
- ・書き方が上から目線になっているので幼児と同等の立場で書くようにと指導された

- ・「～させる」ではなく「～するように促す」「～するように言葉掛けする」の方が良いと言われた
- ・「注意した」「叱る」などのマイナスの表現を使わないようにと言われたがどのように言い換えたらいいのかわからなかった
- ・こどもに注意したり叱ったりしたとき、それを日誌にどう書けばいいのかわからなかった
- ・「2階へ行く」だけではなく「2階の絵本の部屋へ行く」と詳しく書いた方が良いと言われた
- ・その日の指導担当の先生によって「簡潔に書いて」とか「もっと細かく書いて」とか指示にゆれがあって困った
- ・日誌について具体的に注意を受けたことはなかったが、かえってそのため自分が適切に日誌を書けているのか、これでよいのか自信が持てなかった
- ・「促す」はきつい言い方と言われた
- ・日誌にはその日あったことだけを書いて、「気づき」は書かないようにと言われた
- ・「自由遊び」と書いたら自由でなく幼児一人一人に意志があって遊んでいるので「思い思いに遊ぶ」の方が良いと言われた

ここであげられた問題点のうち、(1)については「日本語表現」担当者が指導するのが適切であると考えられ、(2)については「教育実習指導」担当者によるより専門的なアドバイスが必要であろう。とはいうものの、この分類は便宜上のものであり、どちらにもかかわるものも当然ある。たとえば、(1)に分類したもののうち、「制作」と「製作」の使い分けは漢字知識にまつわる問題点であると同時に、幼稚園における漢字用字法の慣習を知らないと適切に指導できない例であろう。また、「詳しく書けなかった」「何を書いたらよいのかわからなかった」については、日本語表現技術の不足のためにうまく日本語文章を作成できないためなのか、それとも実習に際しての観察や専門知識が不十分であったために日誌に書くべきことがわからないのか、あるいはその両方なのか判然としない。また、(2)に分類したもののうち、こどもにたいしてマイナスの表現を使用しないようにするという表現上の配慮については、具体的にどのような語に置き換えるのが適切かという問題については学生の使用語彙の拡大という面で「日本語表現」担当者が助力できる場面もあるだろう。ともあれ、ここからわかることは、実習日誌の指導項目は非常に多岐にわたっていることと、教員のそれぞれの専門分野をいかし、連携して指導にあたることの必要性である。

### 3. 実習日誌記述指導のための教科間連携について

#### 3. 1 「教育実習指導」の概要

「教育実習指導」の授業は1年次後期に開講される「教育実習指導Ⅰ」と2年次前期に開講される「教育実習指導Ⅱ」に分かれている。

「教育実習Ⅰ」では、幼稚園教育実習に備えてこれまで学習した関係科目を総合的に理解し、実習生として必要な基礎的・予備的な知識や技能の習得を目標とする「事前指導」と、1年次観察実習後の振り返りに基づく「事後指導」を行い、幼稚園教諭に求められる知識・技能を理論と実践の両面から学ぶ。「事前指導」では関連科目をふまえた専門知識の補強を行う。それに加えて独自に選定した「教育実習指導 知っておくべき保育現場でよく使う漢字語句 120語」を提示し、漢字テストを実施している。この漢字テストは実習開始までには全員が合格点に達するようになっている。また、実習が近づくと模範例が示されその解説を受けて、具体的な日誌の書き方について学ぶ。その他にも、敬語の運用、電話の対応といった実習中に必要な実務的コミュニケーションについても具体例をあげての指導がある。「事後指導」では、実習時の振り返りを行い学生が自らの課題を発見し、保育の知識・技能の向上を目指しつつ、2年次の本実習に備える。それに加えて実習の礼状の書き方を指導し、あらたまった手紙の書き方や社会人としての心構えを身に着けるようにしている。

「教育実習Ⅱ」では、「教育実習Ⅰ」での学びを踏まえ、指導案の作成、指導案に基づいた指導実践等、幼児の発達に必要な指導の方法や援助の仕方を習得することを通して幼稚園実習の理解を深めていく。本実習終了後には自己評価と自己課題の検討を行い、幼稚園教諭としての自身の課題や目標を明確にしていく。

#### 3. 2 「日本語表現」の概要

「日本語表現」は1年次後期に開講される「日本語表現Ⅰ」と2年次の前期に開講される「日本語表現Ⅱ」がある。

「日本語表現Ⅰ」では文字・表記、文章表現にかかわる日本語の基礎的な知識の習得や大学生活に必要なアカデミックライティングの学習を中心としている。それにくわえて、毎回の授業時には保育の場で頻出する語に関しては、漢字テストと専門的な語彙についての解説を行っている。また観察実習が近づくと、実習の場で必要となってくる敬語やビジネス日本語・ビジネスコミュニケーションについて授業でとりあげている。さらに、遊具で遊ぶ幼児のビデオを観察し、観察記録をつける

という課題にとりくみ、実習に関連する文章作成能力に関する課題の把握と向上を目指している。

「日本語表現Ⅱ」では、「日本語表現Ⅰ」をふまえて、さらに保育者養成校の学生に必要な専門的な語彙・漢字、観察記録や連絡等に必要保育の文章表現技術、保育の現場に出たときに必要な実務的コミュニケーション・ビジネス日本語の習得を主軸としている。また、2年次後期に開講される「保育内容・言葉」に先立ち、こどもの言語特性や言語発達に関するごく基礎的な学習を行っている。その他に、就職支援として論作文や面接、各種就職にまつわる書類の書き方等の指導も行っている。そして、近隣に外国籍の人々の集住地区があり、就職後には幼稚園や保育所に通う外国籍幼児やその保護者に接する機会が多いという本学の特性をふまえ、マイノリティのこどもや非日本語使用者への情報保障のための「やさしい日本語」の紹介や一部導入授業を行っている。

### 3. 3 教科間連携の可能性と今後の課題

以上のように、「教育実習指導」と「日本語表現」はどちらも1年次後期から2年次前期にかけて開講されている科目である。それぞれの教育目標は異なるものの、漢字・敬語・日誌の文章表現指導を中心に、授業内容の一部に重複がある。特に、1年次の観察実習開始直前に、両科目ともに集中的に実習日誌記述指導を行っていることがわかった。その重複は「よりよい実習日誌の記述のため」「実習生としてふさわしい日本語コミュニケーション能力の習得のため」という共通の目的を持っていた結果である。

漢字や敬語、文章表現技術の習得には反復練習が有用であるため、複数の科目で同時に扱われるということは無駄ではなく、むしろ複数の教員による多角的な視点を持った指導が可能であるという意義はあるだろう。特に、日誌の記述指導については、「教育実習指導」「日本語表現」という異なる専門性を持った教員の指導が有効であろうことは、2. で示した調査結果からも予測できる。ここで必要なのは、重複していた項目を整理してなくすことではなく、「よりよい実習日誌指導」を見据えたカリキュラム・マネジメント、すなわち教員同士の情報の共有と、教科間の連携を見据えた教科横断型の授業計画の作成であろう。今後の方針としては、学期開始時、実習前、実習中、実習後のそれぞれの時期において教員間で協議を行い、重複がある授業内容を互いに把握し、より効果的に指導を行っていけるように検討していきたい。

また、この連携に関する継続的な調査と評価を予定している。2016年の1年次観察実習後の「日本語表現」で行われたアンケート結果については、「教育実習指導」担当教員と共有し、見解の統一をはかったのちに学生にフィードバックを行っている。これが2017年の2年次本実習にどのような影響を与えたか検討するために、今後もアンケート等を続行して

調べていきたい。そして、実習終了後の実習日誌にみられる記述についての記述的研究も、今後の課題発見のためには有用であろう。日誌の記述内容をコーパス化し、計量的に語彙・文体についての調査を行い、その特徴を明らかにするとともに、「教育実習指導」担当者と「日本語表現」担当者のそれぞれの専門的視点から記述内容や文章表現技術について評価し、より具体的な日誌記述の問題点やその改善方法について解明していきたい。

最後に、「よい実習日誌」像の個別性について述べたい。誤字・脱字をしないことや、こどもに対して侮蔑的な表現を用いないといった、ごく基礎的でどこにでも通用する日誌記述のルールというものは存在するが、その一方、園や実習先の指導担当者の方針によって、求められる「よい実習日誌の書き方」にゆれがあることも事実である。たとえば、2. 2. 2のアンケート結果からも、実習先の担当者が「自由遊び」という表現を使わないようにと指導する例や、「気づき」を書かないように指導する例が報告されている。このような園の独自の方針を設けている例は、授業内での日誌記述指導では対処しきれないため、個別の対応となる。そこで「教育実習支援室」チームを設け、実習前、実習中、実習後を中心に個別の指導を必要としている学生に対して複数の教員が実習日誌記述の指導を行っている。この「教育実習支援室」チームにも「教育実習指導」「日本語表現」の両担当者が所属し、授業内のみならず教育実習支援という面からも、お互いの専門分野をいかした連携をしていく予定である。

#### 4. おわりに

実習巡回先などで実習先の指導担当者から実習生の実習日誌の記述能力の低下を指摘されることがしばしばあり、また多くの学生が実習日誌の記述に困難感や苦手意識を持っていることが分かっており、実習日誌記述能力の向上は本学において大きな課題とされていた。そのような状況のなかで、「教育実習指導」担当教員と「日本語表現」担当教員は、その教科の特質から学生に日誌記述に関する相談を受けやすい立場にあると言えるだろう。「日本語表現」担当教員に対して学生から実習日誌に関する質問があったとき、その質問に十全に答えるには日本語表現上の知識だけでは不十分で、しばしば「教育実習指導」担当教員に助言を求めることがあった。そして話し合いや情報の共有を行ううちに、授業内容の一部に重複があることなども明らかになり、教科を越えた実習日誌記述指導のための連携が必要なのではないかという結論に至り、可能な範囲で協力を始めたところである。

今後は、授業計画・授業実施状況等についての情報を共有し、定期的な協議をかさねることでお互いの専門分野への理解を深め、また自身の専門分野をいかしてより効果的な実習日誌記述指導法を検討していきたい。そしてこのような教科間の連携の有用性を評価するために、学生を対象としたアンケートの実施や実習日誌の記述に関する計量的な分析研究を継続

的に行っていく予定である。それに加えて敬語、ビジネス会話、手紙の書き方、電話のかけ方など実習の場で支障のないコミュニケーション方略のための指導にも両教科での重複があることが分かっている。今後実習日誌記述指導のみならず、多角的な連携を行ってきたい。

#### 引用文献

井口眞美（2012）「保育者養成校における実習日誌に関する指導法の研究：幼稚園実習日誌に用いられる“時制”についての調査から」『淑徳短期大学研究紀要』,51,pp.109-125

権藤眞織（2007）「保育実習における実習日誌の記述内容と実習成績との関連：学生自身による日誌の内容分析学習を通して」『近畿大学豊岡短期大学論集』,4,pp.39-47

佐藤達全（2014）「保育科学生の文章表現力低下の原因と対応：日本語表現法の課題文と実習日誌を中心にして——」『育英短期大学紀要』,31,pp.57-71

佐藤達全（2015）「保育者をめざす学生の文章力を高めるための取り組みについて：保育実習Ⅰと保育実習Ⅱの実習日誌を比較して考える」『育英短期大学研究紀要』,32,pp.53-72

猿田興子（2008）「保育科短大における実習指導について：教育実習における日誌記述についての考察 その2」『聖園学園短期大学研究紀要』,38,pp.49-60